

開 会 の 辞

山 田 雄 三



簡単にごあいさつ申し上げたい。本日は私どもの催しのために、早朝からご参加をいただき、ご協力について感謝したい。

社会保障研究所は昭和40年1月に発足し、本年で満3年になる。一つはそういう3周年の記念として、このシンポジウムを開催したのであるが、私どもはその3周年ということには、あまり力点を置きたくない。というのは、これが50年、80年となればお祝いをしてもいいであろうが、まだ3年で、むしろこれからが大事だと、考えているからにはほかならない。私どもとしては、こういう機会に学界、ならびに官界の研究にご熱心な方々に集っていただき、社会保障の議論のレベルを少しでも高くするのに役立ちたいと思うのである。社会保障の問題はいろいろ複雑な内容をもっているが、根本は社会保障に関する世論、ことに学界の議論というものをまとめていくのが大切だと思う。この問題についていろいろ意見のちがいもあり、考え方も多少とも分裂をしているのを、整理したり、あるいはまとめたたりする仕事が非常に大事である。そういうことを考えて、この催しを開いた次第である。是非皆さんもそういう趣旨にご協力いただいて、できたらこういう機会を毎年1回ぐらい持ちたい、こういう所存である。

もちろん、社会保障についてはすでに社会政策学会とか社会福祉学会など由緒ある立派な学会が存在し、長い間この分野の研究にとり組んでいる。私どもはここで学会をつくるつもりはない。このシンポジウムは、あくまで社会保障研究所のPRの仕事の一つであり、研究所の雑誌『季刊社会保障研究』の執筆者の方々、もしくは執筆をお願いしたい方々に集っていただいて、知的交流をはかりたいというのが趣旨である。ただ私どもの研究所は社会保障について経済的・社会的背景にも力を入れ、やや広い視野で問題に取り組もうとしており、今日のシンポジウムのテーマもそういう意図を含ませてあるつもりである。いずれにせよ、この機会にわれわれの研究所に対する日頃のご支援を感謝し、また今後の変らざるご支援をお願いしなければならない。また、ただいま受付でお配りした『戦後の社会保障』は私どものささやかな研究成果をまとめたものであるが、これについてもご批判を賜りたいと思う。

本日は1日シンポジウムに当てているので、ご多忙のところ、どうか時間の許す限りご協力をお願いしたい。簡単にごあいさつをさせていただいて、さっそく午前中の報告をはじめさせていただきます。